

Title	小泉信三先生とマルクス『資本論』
Sub Title	Dr. Shinzo Koizumi and Marx's Das Kapital
Author	福岡, 正夫(Fukuoka, Masao)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2018
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.111, No.1 (2018. 4) ,p.1- 11
JaLC DOI	10.14991/001.20180401-0001
Abstract	<p>本稿は小泉信三先生の没後50周年に因み, 昨年12月21日に北館ホールで行われた筆者の記念講演を記録したものである。たまたま昨年がマルクス『資本論』第1巻公刊150周年記念の年でもあったため, 講演のテーマとしては世に知られた先生のマルクス経済学批判が取り上げられている。いわゆる「第1巻と第3巻の矛盾」と目されてきた労働価値と生産価格との離反の命題を中心として, 労働価値説の存在意義をめぐって展開された先生の的を射た推論を概観し, 併せて現代の見地からしても至当なものとして評価すべき所以を述べた。</p> <p>This paper offers a record of my memorial lecture delivered on December 21, 2017, commemorating the 50th anniversary of the death of Dr. Shinzo Koizumi. Since last year marked the 150th anniversary of the publication of Karl Marx's Das Kapital, Volume I, my lecture's theme is congruently Dr. Koizumi's celebrated criticism of Marxian economics. Based upon the well-known argument on the deviation of labor value from production price, his critical examination of the raison d'être of the labor theory of value is surveyed and evaluated from the perspective of modern economics.</p>
Notes	経済学講演会
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20180401-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20180401-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 小泉信三先生とマルクス『資本論』

福岡正夫\*

Dr. Shinzo Koizumi and Marx's *Das Kapital*

Masao Fukuoka\*

**Abstract:** This paper offers a record of my memorial lecture delivered on December 21, 2017, commemorating the 50<sup>th</sup> anniversary of the death of Dr. Shinzo Koizumi. Since last year marked the 150<sup>th</sup> anniversary of the publication of Karl Marx's *Das Kapital*, Volume I, my lecture's theme is congruently Dr. Koizumi's celebrated criticism of Marxian economics. Based upon the well-known argument on the deviation of labor value from production price, his critical examination of the *raison d'être* of the labor theory of value is surveyed and evaluated from the perspective of modern economics.

**Key words:** labor theory of value, production price, constant capital, variable capital, surplus value, organic composition of capital

**JEL Classifications:** B12, B14, B21

---

本稿は小泉信三先生没後 50 周年に因み、昨年 12 月 21 日に経済学会の主催の下で行われた筆者の講演をそのまま活字化したものである。企画の実現にあたり万般の労をとられた丸山徹名誉教授に対し深甚の謝意を申し述べておきたい。

\* 慶應義塾大学名誉教授  
Professor Emeritus, Keio University

## 始めに

では始めさせていただきます。このたびは小泉信三先生没後 50 周年記念ということで、皆様にお話しすることを仰せつかりました。実は先生につきましては、これまでも没後 10 周年のときを初めとして、折あるごとに何回かこのような形で話をする機会を頂いてまいりました。どうも毎回同じ者が出てきて変わり映えがしないのではないかといささか気が引けるのですが、これは思いますのに、時が経つにつれてだんだんご生前の先生を存じ上げている者が少なくなってくるということにもよるようで、何卒事情をご斟酌の上、お許しいただきたいと存じます。

50 周年と申しますと、先生は今からもう半世紀も前、1966 年の春にお亡くなりになったのですが、そのときに受けました衝撃はいまだに私の心を去っておりません。少々私事にわたる話になって恐縮ですが、その年の春、私はたまたま本塾大学からの派遣留学生かつまたケンブリッジ大学への訪問研究員としてイギリスのケンブリッジ大学に旅立つことになっておりまして、その出発直前にご報告とお暇乞いのご挨拶を兼ねて麻布広尾の先生のご自宅に参上したのです。そのとき先生はまだお元気でいらっしゃいまして、かつて 20 年ほど前にエリザベス女王の戴冠式にご列席の当時の皇太子殿下、現在の天皇陛下に随行されました折いろいろとお世話になった外務次官の鳥さんが今はちょうど駐英大使をなさっていて、ご昵懇の間柄であるので、何らかの折に役立つであろうとおっしゃって、私のために大へんご懇切な大使あてのご紹介状を書いて下さいました。そのご紹介状を有難く頂戴してイギリスに出発しましたがまだ肌寒い 3 月下旬のことでしたが、それからケンブリッジの地に到着して漸く身辺が落ち着き、研究生活にも馴染んできた頃合に、突如として電報で先生のご訃報に接したのです。

青天の霹靂と言いますか、あまりにも急なご逝去のことで、しばし茫然としてなすすべも知らず、そのとき心にあいた空隙は 50 年を<sup>けみ</sup>閲した今にいたりまして、なお埋められるところがありません。寂寞を嘆じ敬慕を寄せる気持は、時とともにかえって募るばかりであります。

さて皆様よくご存知のとおり、小泉先生は慶應義塾の生んだ偉大な学者かつ教育者でありまして、とくに戦前から戦後にかけての大へん困難な時期、苦難の時代の中にあって、名塾長として誉れ高いご功績を残されました。また優れた文筆家として言論界でもいろいろとご健筆を振われ、いわば一世の師表としてわれわれ国民の拠って立つべき教えを世に示されますと同時に、当時の皇太子殿下、今の天皇陛下のご教育にも携われまして、そのご成婚にあたりまして力を尽されました。さらにまた先生はご自身もスポーツマンであられまして、本塾の庭球部や野球部の発展にも顕著なご貢献をなさいました。このように小泉先生はわが国そしてわが慶應義塾の歴史的な歩みの上に、まことに多方面にわたって大きな足跡を残された方ですので、そのいずれの側面に光を当てるかによって、人は何枚もの先生の肖像を描くことができると思います。

が何分にもきょうの記念講演は経済学会の企画に由来するものでありますので、また顧みまして私自身が先生のご著書『スミス・マルサス・リカード』や『マルクス死後五十年』などにより初め

て経済学という学問への蒙を啓かせていただいた者であり、その後も先生からの絶大な影響の下で不肖ながら先生と同じ理論経済学という分野で勉強を続ける恩恵に浴した者でありますので、きょうの話はやはり学者としての先生の経済学上のご功績にテーマを定めさせていただくのがもっとも理に適っているのではないかと思ひ設けました。しかも本年はたまたま先生が熱心に取り組まれたマルクスの主著『資本論』第1巻の公刊150年を記念すべき年にも当たりますので、ご案内のとおり小泉先生の著名なマルクス経済学批判に話の内容を絞ることにした次第であります。

### 経済学者としての先生のお立場

ということで以下の話のもっぱら先生のマルクス経済学批判を対象としたものになりますが、本論に立ち入るに先立って、ここであらかじめ経済学一般に対する先生のお立場がいかなるものであるかを皆様へ申し上げ、前以てご理解いただいておりますのがよろしいのではないかと存じます。経済学の分野で先生のお名前を高からしめたもっとも顕著なご業績がイギリス古典派の経済学者リカードの研究にあることは、ここにおいでの方々がよくご存知のところと思いますが、そのことについてまず注意しておかねばならないのは、先生が精魂を傾けてリカード経済学に取り組まれたからといって、先生ご自身は決してリカード一辺倒のいわゆるリカーディアン、リカード原理主義者になられたわけではないという点であります。先生はリカードの研究に取り組む前に、先生の先生すなわち福田徳三先生の教えによりまして、限界効用学派のゴッセンやジェヴォンズの研究にも携わっておられまして、ご承知のとおりリカードの主著『経済学および課税の原理』の翻訳をされたばかりではなく、それに先立ってジェヴォンズの主著『経済学の理論』の訳書をも公刊しておられました。ところがこのジェヴォンズという学者はリカードときわめて鋭く対立した学者でありまして、「リカードは経済学の車輪を間違った軌道に引き入れてしまった、有能ではあるが誤った思想を持った男である」とまで酷評した人です。そのようなジェヴォンズから経済学に入られた先生がリカードを捨て去るどころか、逆に彼に大へん高い地位を与えられたというのはきわめて注目すべき事実ではありますが、これはひとえに先生が現在の視点からいたしましてもきわめてオーソドックスな見地からリカードと取り組まれたこと、リカードの経済学の中でもジェヴォンズのいわゆる「間違った軌道」にあたる場所は踏襲されないで、かえってその後の経済学の「正しい軌道」のほうにリカード経済学の採るべき部分を包摂吸収するという立場をとられたからであります。

この点は先生のリカード価値論の受け取り方からもよく窺われるところでありまして、リカードは価値論上いわゆる労働価値説すなわち商品の価値はそれをつくるのに直接・間接に投下された労働量によって決まるという価値学説を提唱いたしました。つまりそれぞれの商品の価値はその商品の生産に現場で従事している労働者の労働ばかりではなく、同時に用いられる原材料や機械設備などの資本財の中にすでに含まれてしまっている労働量をも含めて、その商品の中に体化されて

いる全労働量によって決まる、というのがそれであります。しかし彼は、商品によってその生産に直接用いられる労働と、機械のような固定資本との比率が異なること、その固定資本の耐久性も長短さまざまであること、さらにまた原材料などの流動資本の回転率も違うこと、これらの理由によって労働価値説が純粋な形では支持できないことをやがて悟りまして、それを「修正」して結局価値はより一般的に生産費によって決まるといういわゆる生産費説を唱えざるをえないことになりました。そのように、労働価値説というものが資本側からの事情によって影響を受けざるをえないということを一早く看破した点は、さすがにリカードウの経済学者としての才能を指し示す事実であります。ところが当のリカードウ自身はなおもとの労働価値説のほうに強い執着を持っておりまして、問題の修正が自分本来の基本的な構想に与える損害を極力最小限に抑えようと努めました。そこで彼は、そういった修正要因のほうが変化することで交換価値が変化する事態は、本来の投下労働量が増えることによって交換価値が増える事態に比べれば大して多くない。そうした可能性はたかだか全体の7%くらいで、残りの93%は依然として労働価値説で説明できる、と言い張りました。のちにアメリカのスティグラールというノーベル経済学賞をとった経済学説史家がリカードウの労働価値説のことを「93%の労働価値説」と呼んだのは、こうした事情を指して言っているわけであります。しかし小泉先生は、リカードウ経済学を尊重されたとは申しましても、今述べたようなリカードウのスタンスにはまったく同調されるところがなく、最初から修正されたのちの価値論のほうを100%生産費説として受け継がれました。つまり先生は修正説のほうをのちのマーシャルの長期正常の均衡理論に通ずる考え方をあらかずものと解されて、それをより一般的な需給均衡理論の一つのスペシャル・ケースとして位置づけるという、今日から見てきわめてオーソドックスな立場をとられたわけであります。

一方リカードウ、そしてあとで述べるマルクスは需給均衡説すなわち需要と供給のメカニズムが価値・価格を決定するという考え方を真向から否定しまして、需給がバランスするところでは力がいずれの方向にも働かなくなるから、何ものの決定にも無力になるという、今日の見地からすればはなはだ奇妙な見解を表明したのですが、小泉先生はそうした需要供給無力説といういわば「悪きリカードウ」の誤謬ないしは混乱には陥られることなく、あくまでリカードウの価値論を生産費説として受け取られて、それをゴッセンやジェヴォンズの限界効用説とともに、より一般的な需給の均衡理論の中にそれぞれ包摂止揚するという正しい道をいち早く歩まれたのであります。

この点を証拠づける文章は、当時先生がお書きになったものの随所に見出されますが、ここに一つだけその点をもっとも端的に示す先生の文章を引用させていただきますと、先生はこれら二つの考え方、生産費説と限界効用説を「決して両極端を忌む折衷の意味において相調和せしめんとするのではなく、その厳密な吟味によって両者は当然両立すべき理論構造をもつがゆえに、それらを総合するのである」と述べておられるのであります。この「両者は当然両立すべき理論構造をもつ」という点を私はとくに強調しておきたいと思いますが、そのようにリカードウの学説をもその後の

ジョン・スチュアート・ミルやマーシャル、またワルラスへと通ずる需給均衡の一般理論の中にジェヴォンズの限界効用説とともに統合するというオソドックスな道を開かれたところに、以降の慶應義塾また日本の経済学界に対する先生のもっとも重要なご功績があるのだということを、以下の話への準備としてまず前以て理解しておいていただきたいというのが、以上縷々述べてまいりましたことの趣旨にほかなりません。

### 『資本論』がまず当面する問題点

それだけのことを申し上げた上で、いよいよ本題の、マルクス経済学に対する先生のご批判の話に移らせていただきます。その対象となるマルクスの主著『資本論』は、始めにも申しましたとおり、その第1巻が今を去ること150年前の1867年に出版されました。彼の生前に世に出ましたのはこの第1巻のみで、第2巻、第3巻はよく知られているように彼の死後になって友人エンゲルスがマルクスの残した遺稿を整理して公刊の運びにしたところでもあります。この全3巻に展開されたマルクス経済学体系は、先ほど来述べてまいりました先生のお立場からして決して受け容れられるべき内容のものではなく、当初から批判的とされましたのは当然の成行きでありました。

事実、先生は1922年あたりからマルクス批判の論説に筆をお振りになり始めまして、まずその最初の論説が『改造』という雑誌に発表されるやいなや、それを発端としてマルクス主義者の河上はじめ、山川ひとし、榎田民蔵などの諸氏とのあいだに、『改造』、『解放』、『社会問題』などの誌上をつうじて華々しい論争が引き起こされることになりました。この一連の論争は、その規模におきましてもヨーロッパではかの有名なベーム・バヴェルクとヒルファーディングとのあいだに戦われた論争と、東西好一対をなすものと見なされております。ここでその全貌に立ち入ることは時間の都合上できませんが、マルクスを経済学の体系として論ずる場合、やはり中心となるのは彼が分析の礎石とした労働価値説だと思われまますので、以下ではその労働価値説を対象とした小泉先生のご批判に焦点を合わせて申し上げていくことにいたします。

皆様よくご存知のとおり、マルクスはまず『資本論』の第1巻において、リカードウに倣いまして、すべての商品の価値はその商品をつくるのに必要な直接および間接の全投下労働量に等しいという労働価値説を提唱いたしました。したがってどの商品もそれが市場で他の商品の一定量と交換されるのは、それらの中にそれぞれ等しい量の労働が含まれているからだ、ということになるわけでありまます。

すると、この説にしたがえば、労働力というものもやはり市場で取引される商品の一つですから、やはり労働価値説の適用を受けまして、労働力の価値は労働者がみずからの労働力を再生産する上で必要とする生活資料すなわち彼自身および彼の家族を扶養するに足る消費財の中に含まれている労働量であるということになります。

ところが資本主義体制の下では労働者階級は自分ではいっさい生産手段を持っておらず、その所

有者たる資本家に雇われなければ生活していくことができないので、資本家はその特権のゆえにこれらの労働者をその労働力の価値を越える労働時間にわたって働かせることができる。したがって労働者のつくり出す価値は、用いられる労働力の価値を必ず上回ることになる。その超過部分すなわち不払い労働の分がマルクスの用語では「剰余価値」と呼ばれるもので、それが結局資本家階級の取得する利潤の源泉であると考えられているのです。ここで注意すべきは、マルクスではそのような剰余価値を生み出しうるのが直接労働すなわち現場で生産に携わっている労働だけで、価値を増殖できるのはその部分だけである、機械設備などの資本財のほうはみずからの価値をそのまま生産物の中に移すにすぎない、と考えられている点です。そのゆえをもって、マルクスは生産に必要なとされる資本のうち直接労働を雇い入れるための元手に当たる部分を「可変資本」、資本財の使用ならびに減耗の補填に充当される部分を「不変資本」と名づけたのでした。

さて、そういうことで、利潤の源泉となる剰余価値はもっぱら可変資本のみによってつくり出され、不変資本はいっさい剰余価値を生み出さないということになりますと、ここに一つの大きな問題が生じてくることになります。いま話を分かりやすくするため不変資本、可変資本両方を合わせた総資本が同額の二つの生産部門 A、B を考えて、ただ資本の内訳は部門 A のほうが可変資本の不変資本に対する比率が高く、部門 B はその比率が A より低いとしてみます。するといま自由な競争が行われて資本が利潤率の低い部門から高い部門に自由に移動する結果、どの部門でも相等しい平均利潤率が成り立ったとすれば、部門 A と部門 B の総資本が同額である以上、その同額の総資本に等しい利潤率がかけられるわけですから利潤もまた両部門では同じになるはずで、そこでいまマルクスにしたがって、可変資本、不変資本を合わせた総資本に平均利潤率で計算した利潤を付加した価値額を「生産価格」と名づけるとすれば、A、B 両部門の製品の生産価格には格差が生じるはずはありません。ところが部門 A のほうが部門 B より可変資本の不変資本に対する比率が高いわけですから、やはりマルクスにしたがってこの比率を「資本の有機的構成」と名づけますと、剰余価値を生み出しうるのが可変資本の部分だけである以上、資本の有機的構成がより高い部門 A の製品のほうが、投下された労働量で計算された労働価値は、部門 B の製品より高くならざるをえません。ということで、両部門で資本の有機的構成が異なれば、総資本は同じであっても労働価値には格差が生じざるをえないわけで、生産価格が市場での交換比率になるとすると、それは労働価値と相異ならざるをえない。要するに、労働対資本の資本の有機的構成が部門間で異なれば生産価格から労働価値は離反し、市場での交換比率は労働価値どおりにはならなくなるという、かつてリカードウが当面したのとまさに同じ問題にマルクスもまた行き当たらざるをえないのです。そこで彼もまた主著の第 3 版では、資本の有機的構成が部門間で異なる場合には各商品は生産価格にしたがって交換されるのであって、労働価値からの離反が生じざるをえないと説くにいたりしました。

これがいわゆる「第 1 巻と第 3 巻の矛盾」と呼ばれる問題でして、第 3 巻の公刊以来ベーム・ヴェルクを初め多くのマルクス批判者はこの点についてマルクスに対し論理的自己矛盾の罪を宣告

してまいりました。小泉先生もまたマルクス批判としてまずこの問題を取り上げられまして、マルクスが同じ著書の中で一方では労働価値が交換価値として実現するためには自由な競争が行われ、どの商品の生産部門でも利潤率が平均化するのではなくてはならないと言ひ、他方ではそのように利潤率が平均化する結果、市場で成立する交換価値は労働価値から離反せざるをえないと説くのは、話の辻褃が合わないのではないか、「商品相互の価値どおりの交換は自由競争を俟って初めて行われる。否な自由競争なき処に初めて行われる、と同じマルクスが主張する、收拾し難き混乱はこれがために生じたのである」と述べられました。

## 労働価値説の二面性

確かに可変資本・不変資本比率すなわち資本の有機的構成が異なれば労働価値は生産価格から離反せざるをえないというのは、何びとも否定することのできない主張ですが、ただこれをもってマルクスがみずからの著書の中で図らずも論理上自己矛盾を犯したかのごとくに評するのは、より内在的な見地から眺めますと必ずしも正当な評言とは申せないように思われます。この点はマルクス自身が意識して、第1巻と第3巻では相異なる抽象レベルに立って議論を展開しているからだと解するのが、近時のマルクス解釈としては正論であるように思われるのです。すなわち彼は第1巻ではひとまず資本の有機的構成がどの部門でも均等であるかのごとくに想定して、むしろマクロ的な見地から、その下で労働価値どおりの交換が行われたとしても、なお剰余価値が生産過程で発生しなければならぬという事情を究明している。これに対して第3巻では、こんどはより現実的に抽象度を緩めて部門間で資本の有機的構成が相違することを認めた上で、そのような剰余価値の総額が事実上生産価格にしたがって各部門間で「再分配」されざるをえないという離反の実情をむしろみずから説明しようとした、というのがそれでありました。この点は流石にシュンペーターなどはよく事情を<sup>わかま</sup>弁えておりまして、彼の言葉を引用しますと、「もしわれわれが自己をマルクスの立場において見るならば、まず剰余価値を一つの統一体とみなされた社会的生産過程のつくり出す「総量」と見、続く議論をその総量の分配の考察とみなすことは、決して不合理ではない。そしてこれが不合理ではないとすれば、第3巻で推論された商品の相対価格（すなわち生産価格）が第1巻の労働価値説からの離反として導かれると主張することも十分に可能である」というわけでありました。

したがいまして、もしそのように見ることが正しいとすれば、第1巻と第3巻のあいだのこうした労働価値説と生産価格説の食い違いをマルクスの意図せざる論理的誤謬であるかのように見なすのは必ずしもフェアではなく、小泉先生のこの食い違いに関するご批判も、転じて前にリカードウの価値論の修正に対して先生がお示しになったスタンスと整合的な議論の立て方が主軸をなすと解するのでなくてはなりません。すなわち、このようにもし労働価値説、生産価格説の両者が食い違ふとすれば、交換価値の説明原理としてより適切なのは生産価格のほうなのであるから、それから離反した労働価値説のほうの方が棄てられねばならないはずである。それなのにマルクスの立場におい

て労働価値説が棄てられるどころか、なお重要視されるのはなぜであるか。経験的な経済学の立場からすればその理由を正当化することができないという批判の論旨が、つづく先生の労働価値説批判の核心となるのであります。

話がこの点にいたりますと、一口に労働価値説と申しましても、はっきりと区別しておかねばならない二つの側面があることに注目する必要があります。その一つはいわゆる相対価値、つまり商品と商品とが市場で交換される場合にその交換比率を説明する原理になるという意味での労働価値説、もう一つはそれとは違って、それぞれの商品の中に体化された労働の量そのものがその商品の価値の本体、根源をなすという意味での絶対的な労働価値説で、この二つはまったく違うものだと解するのでなくてはなりません。

前者の意味での労働価値説、商品間の交換比率を説明する理論としての相対的な労働価値説のほうは、経験科学としての性格を持つ価値学説ないしは価格理論の一つのスペシャル・ケースでありまして、そういうものとしては現代のオーソドックスな経済学体系の中でも、狭いながら存在場所を占めうる一つの健全な理論であります。ただそれが成立するためにはいくつかの特殊な条件が満たされていなければなりません。もし(1)完全競争が支配していること、(2)生産関数がすべて規模に関して収穫不変の性質を満たしていること、(3)結合生産物、つまりその商品の生産から同時に副産物として抱き合わせに生産される他の生産物がないこと、(4)稀少な本源的生産要素が労働のみであること、(5)各生産部門で労働と物的資本との比率(マルクスの用語では可変資本と不変資本とのあいだの資本の有機的構成)がみな同じであること、以上の五つの条件がすべて満たされていると仮定されれば、その下では物と物との交換比率は必ず投下労働量どおりになる、というのはまったく正しい定理なのです。この命題は現代の経済学においてもサミュエルソンやジョルジュ・ロージェンの「非代替可能性定理」と呼ばれる定理に関連して登場するところでして、ここでは今述べた五つの仮定群は、市場均衡価格が需要側の事情にはまったく依存せず、もっぱら供給側の事情からのみ決定されることがあるとすれば、それはどういう条件下であるかを示す一つの極端なスペシャル・ケースを特徴づける条件のミックスと位置づけられております。

問題はそうした前提条件の経験的な妥当性でありまして、上記の条件のセットが満たされない場合には、その帰結としての労働価値説もまた経験的な妥当性を失うことになる。つまり以上に述べてきましたような相対的な意味での労働価値説は、それら基本的な仮定の経験的な妥当性ととも立ちともに倒れるという意味で、検証とか反証とかいう科学的手続きを受け容れる資格を具えていないわけでありませぬ。

その脈絡において事態を見るかぎり、労働価値説と生産価格説は経験的な理論仮説としては二者択一的であるほかないわけにして、マルクス自身が示したように、上記の条件(5)を外しただけで市場で観察される交換比率は生産価格となり、労働価値はそれから離反するというのであれば、労働価値説のほう棄却されるのでなくてはならない。そういうことにならざるをえないはずなのです。

## 絶対労働価値説は科学たりえない

ところが、もう一方の絶対価値という意味での労働価値説は、そうした認識論的な位置づけをまったく受け容れない概念でして、ご存知のようにマルクスは『資本論』第1巻ではなぜ各商品の価値が労働であるかを論証する上で、いわゆる「蒸留法」というのはなほだ疑わしい推論を頼りにするほかありませんでした。それは簡単に言えば、それぞれの商品から異質な属性を次々に取り除いていくと、最後にどの商品もが労働の生産物であるという共通の属性が残る。つまり蒸留の結果、凝結して最後に共通に残るものが労働なのだから、すべての商品の価値の実体は労働なのだ。そういうロジックが展開されているわけなのです。

そのような必ずしも説得的でない論法で、価値とは各商品の中に体化している労働量なのだとした上、マルクスは、だから商品がある一定量の他の商品と交換されるのは、それらの商品の中に等しい量の労働が含まれているからだ、と述べましたが、この言明もまた、それらが交換されるがゆえに等しい労働量を含んでいるはずだ、という断定以外の何ものでもありません。つまり誰もそれらが交換されるに先立って、それらの中に等しい労働量が含まれていることを測ったわけではなく、したがって実際に成立した交換価値があらかじめ測定しておいた結果どおりになったという意味で、その主張が実証されたわけではありません。

この点をいささか私流儀の言い方で言わせていただきますと、かつて著名な経済学者サミュエルソンが「顕示された選好」(“Revealed Preference”)の理論というものを提唱したことがありまして、もしある個人が商品の組み合わせAのほうを選んで組み合わせBのほうは選ばなかったとしたら、これは彼にとっては組み合わせAのほう<sup>あらわ</sup>が組み合わせBより効用が高いということの顕れだとしたのですが、この場合もあらかじめ彼にとっての組み合わせAの効用と組み合わせBの効用を測っておいて、AのほうがBより効用が高いということを確認しておいたわけではない。たんに彼がAのほうを選んだという観察された事実から、Aのほうが効用が高いはずだと言っているにすぎません。そこでサミュエルソンのそうした用語に倣って、いまのマルクスの等価交換の議論にあてはめてみると、これは(私の造語ですが)「顕示された等価性」(“Revealed Equivalence”)ということになるわけで、マルクスの場合もたんに商品Aの一定量と商品Bの一定量が交換されたという観察された事実をもって、それらには相等しい労働量が含まれているはずだと言っているにすぎず、それらに等しい労働量が含まれていることがあらかじめ確かめられているわけではないのです。つまりそうした言明自体はいわば一種のトートロジー、同義語反復であって、何ら経験的な妥当性、経験的に有意味な命題が実証されているとは言えないのです。

小泉先生のマルクス批判に話を戻しますと、この点も先生が明確に指摘されているところでありまして、つぎのように述べておられます。すなわちマルクスは、「商品はある一定量の労働がその中に体化されているがゆえに価値を持つ」と言い、また「価値とは労働がその商品の中に体化されている量をいう」と定義しているわけであるから、結局煎じ詰めれば、これは「商品はある一定量の労働

働の生産物であるがゆえに、ある一定量の労働を含んでいる」というトートロジー、同義語反復に帰着せざるをえない。ということで、絶対価値という意味での労働価値説は、何ら経験的妥当性を主張しうる有意味な言明ではない、というのが先生の労働価値説に対する批判の要点であります。

では、もしそうだといたしますと、マルクスの立場ではなぜ労働価値説が一般には生産価格と食い違うにもかかわらず、なお体系の礎石として必要不可欠とされるのか、が問われなければなりません。この点について先生は、それはこうした絶対価値の意味での労働価値説を固守することなしには、利潤の根源となる剰余価値が労働のみのつくり出しうる価値からの搾取であるということが言えないからである、つまりマルクスが生産価格という上<sup>うわ</sup>辺のバールに包まれた資本家的計算の欺瞞性を暴露したいという動機を捨て去らないかぎり、そしてあくまで労働が利潤の唯一の源泉だということを示そうとしつづけるかぎり、彼にとっては労働価値説が金科玉条とならざるをえないからだ、と主張されるわけであります。

こうして労働価値説は、先生のご指摘どおり、マルクスにとっては剰余価値というものを搾取として rationalize する上でどうしても必要である。つまり表面的に市場で観察される生産価格だけが問題なのではなく、そうしたいわゆる現象形態の奥底に労働価値という実体、本質がある。その本質からの離反ということで生産価格が説明されるがゆえに、そのもとになる労働価値説が重要なのだというのがマルクス流の議論の立て方になっているわけですが、そうしたマルクスならびにマルクス主義者たちの考え方は、要するにそう信じる者のみがそれに支えられて政治活動に身を投ずる信条にすぎない。先生のお言葉を引用しますと、「ひとえに、この理論の政治上の利用価値のためではないか」というのが、先生の結論されるところであります。

かつてサミュエルソンが同じようにマルクスを批判いたしまして、マルクスは「真理はつねに本質プラス離反に等しい」と言うが、自分の側から言えば「真理はつねに誤謬プラス離反に等しい」とも言える、ときわめて辛辣な言葉を述べたことがあります。これは言うまでもなく労働価値からの離反で生産価格を説明するといっても、離反のもとになった労働価値説のほうが本質だという含みは少しもない。誤謬に離反を足せばいくらでも真実が説明できるじゃないか、というのがその意味するところであるわけです。小泉先生が結論されていることとサミュエルソンが彼流の辛辣な言葉で言っていることは、それぞれ独立に述べられたものであるにもかかわらず、まったく同趣旨の批判に帰着するものにほかなりません。

## エピローグ

以上錯綜した議論を長々と述べてまいりましたが、これでマルクスの経済学とりわけその土台石をなす労働価値説に対して小泉先生がオーソドックスなご見地からどのような批判を開陳されたかということが、お聴きの方々とりわけ若い世代の諸君にご理解いただけましたようなら、大へん嬉しく存じます。

そろそろ頂戴いたしました時間も残り少なくなってまいりましたようなので、あと若干の補足を申し添えて結びにさせていただきたいと思いますが、マルクスの思想体系は経済学の領域に限られるだけのものではありませんで、はるかにより広い範囲にわたるものであります。本来マルクスは、まず歴史というものを弁証法的なプロセスとして捉える方法をヘーゲルから学び、ついでフォイエルバッハの唯物論哲学にしたがって、そのような歴史の推進力をヘーゲルのように普遍的な絶対精神というものではなく、物質的な条件に求める立場に移行いたしました。しかし、フォイエルバッハよりももっと実践的で社会的な志向の強かったマルクスは、フォイエルバッハの哲学的抽象的な思弁の世界には飽き足りませんで、やがてプルドンなどフランスの社会主義者からの影響をつうじて、社会の弁証法的な発展の行きつく先は私有財産の廃止された自由の状態であって、これを実現すべき歴史的な使命の担い手こそがプロレタリアートであるとの見解に達したのでした。そういうことで、マルクスが本格的に経済学なかんずくりカードウ経済学の研究に手を染める 1844 年ころまでには、すでに彼のプロレタリアートによる私有財産否定の図式は明確に定式化されていたわけであります。つまりある論者が譬えて言いましたように、ドイツの歴史哲学が建物の一階、フランスの政治思想がその二階であるとすれば、イギリスの経済学は彼にとってはこの構造を変えないかぎりでの三階の必要工事にほかならなかったのです。

小泉先生のマルクス批判を全般的に論ずるには、より広くそうした一階、二階の基礎工事の部分に対する先生の周到なご議論にも触れなければならないのですが、きょうは与えられました時間の中でそのすべてにわたって論ずることは到底不可能なことで、それらにつきましては残念ながらまた別の機会に譲るほかはありません。つぎの先生の没後 60 周年の節目にはもはや私自身が没後の人になっていると思いますので、いささか未練が残りますが、きょうは今年が『資本論』第 1 巻公刊 150 周年の年でもあるということでしたので、三階の経済学の部分のみに対する先生のご批判に話を限定することになりました。その点につきましては事情をご了承の上、何卒ご寛恕いただけますようお願い申し上げます、この辺で話を閉じさせていただきたいと存じます。

どうも長い時間、込み入った話をご清聴下さいまして、まことに有難うございました。

**要旨:** 本稿は小泉信三先生の没後 50 周年に因み、昨年 12 月 21 日に北館ホールで行われた筆者の記念講演を記録したものである。たまたま昨年がマルクス『資本論』第 1 巻公刊 150 周年記念の年でもあったため、講演のテーマとしては世に知られた先生のマルクス経済学批判が取り上げられている。いわゆる「第 1 巻と第 3 巻の矛盾」と目されてきた労働価値と生産価格との離反の命題を中心として、労働価値説の存在意義をめぐって展開された先生の的を射た推論を概観し、併せて現代の見地からしても至当なものとして評価すべき所以を述べた。

キーワード: 労働価値説, 生産価格, 不変資本と可変資本, 剰余価値, 資本の有機的構成